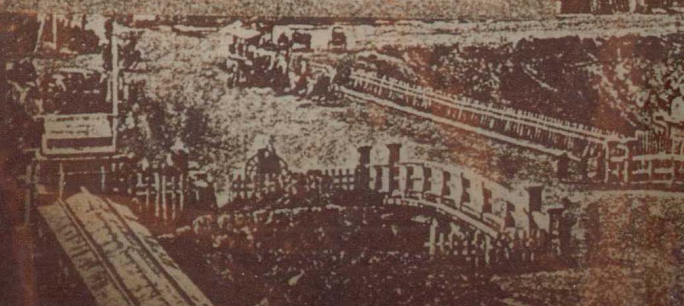


# 典厩五郎

Gorō Tenkyū

# 小栗上野介

# の秘宝



〈著者略歴〉

典厩五郎 (てんきゅう・ごろう)

本名、宮下教雄。昭和14年9月東京生まれ。立命館大学文学部卒。新聞記者を経てシナリオライターとなる。昭和62年『土壇場でハリ－・ライム』で第5回サントリーミステリー大賞と読者賞をダブル受賞。主な著書に『シオンの娘に告げよ』『紫禁城の秘宝』『ロマノフ王朝の秘宝』『炎帝の遺産』などがある。

小栗上野介の秘宝

一九九一年一月三〇日 第一刷発行

著者 典厩 五郎

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三三三(新東京ビルディング)〒一〇〇  
電話東京(三三三)三三三三(代表) 振替東京六一五一六四三

印刷所 大日本印刷

製本所 小高製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。



¥1400

## 目次

序章	……………	五
第一章	赤坂・葵坂	………八
第二章	小石川・切支丹坂	………三
第三章	本郷・暗闇坂	………六
第四章	牛込・神楽坂	………九
第五章	横浜・谷戸坂	………一六
第六章	湯島・妻恋坂	………一七
第七章	駿河台・富士見坂	………二〇
第八章	神田・紅梅坂	………三四
終章	……………	三六

装幀／辰巳四郎

# 小栗上野介の秘宝

〈主な登場人物〉

秋庭圭次郎

元北町奉行所与力

銀造

元岡っ引き

お光

銀造の娘

岡部善子

元圭次郎の許婚者

高橋泥舟

元公武所槍術師範役

お悠

泥舟の妻

速見理介

豪商

美和子

速見の娘

江藤新平

司法卿

島本仲道

司法省警保頭

片山新之介

警保寮少警部

万年彦之進

同

仮名垣魯文

戯作者

蛇熊

深川の顔役

疵政

一匹狼のヤクザ

赤石鎌三郎

元岡部家人

斎藤一

元新選組三番隊長

山岡鉄舟

泥舟の義弟

## 序章

徳川の世が明治となり、江戸が東京と改められた当時の混乱ぶりは猛烈をきわめた。

たとえば江戸時代の庶民たちにとって、「出ものはれものところ嫌わず、出たいときにするのが小便」だった。また天下の往来をふんどし一つで歩こうと、だれに文句をいわれる筋合いもなかった。

だが欧米諸国に追いつけ追い越せを合言葉とする明治新政府は、まず江戸時代から続く庶民たちのそのような悪習慣を根絶せんものと決心する。

明治五年十一月、時の司法省は、現代でいうなら軽犯罪取締法ともいうべき、

——いしきまいいじようれい 違式註違条例 ——

なる舌を噛みそうな名前の法例を発した。施行は当面、首都である東京府のみに限られたが、その代表的な違反条例をあげると、以下の通りである。

- 一、インチキな飲食物、ならびに腐敗せる食物と知りながら売りたる者
- 一、春画、およびその類の諸器物を売りたる者

- 一、身体に刺繡（入墨）をなせし者
- 一、夜中、無燈の馬車を走らせし者
- 一、男女混浴の湯を渡世せし者
- 一、裸体、または股脛をあらわにせし者
- 一、婦人にていわれなく断髪をせし者
- 一、蓋なき糞尿桶を運搬せし者
- 一、人力車に無理強いして乗車させんとせし者
- 一、市中往来において便所以外の場所へ小便せし者
- 一、店先において幼児に大小便させし者

この「違式註違条例」に違反した者は、六錢二厘五毛から一円五十錢までの罰金とした。

違反者もつとも多かつた立小便を例にとると、罰金七十五錢で、当時の七十五錢といえ、親子三人が高級料理店で腹いっぱい食べてもお釣がくる金額である。

庶民たちにとってはそれこそ目の玉の飛び出るような罰金だった。そのうえ取締る側も取締られる側もはじめてのことである。珍妙なやりとりが続出した。

明治六年二月の末、凍えるような寒い日の午後のことだった。

吉原京町二丁目にある勢喜長屋局見世「小梅」の遣り手喜代は、朝方、ふと思ひ立つて亀井戸



妙義神社まで参詣に出かけた。

その帰り道である。隅田川沿いの押上土手で喜代が思わず放屁をすると、あいにく近くを通りかかった邏卒らそつ(巡査)が聞き咎めた。

喜代はあれこれ言いわけをしたが、邏卒は許さず、罰金七十五錢を収納させてのち、やっと喜代を放免した(当時の新聞より)。

## 第一章 赤坂・葵坂

—

司法省警保寮少警部、片山新之介は浅草元鳥越にある邏卒屯所にふらりと顔を出した。

「少警部、いいところへきてくれました。ご連絡しようと思つていたところです」  
部屋の奥から、屯所を預かる権少警部の沢田友之助が急いでやつてきた。

「なんだ、きみに借金はなかつたはずだぞ」

片山は冗談をいって笑つたが、沢田はなぜか緊張していてにこりもしない。

「今日はなにか？」

「いや、この近くに長患いしてる知人がいてね。見舞いの帰りだよ」

「それなら時間がありますね」

沢田はそういうと、片山の制服の袖をひっぱるようにして一隅の火鉢の前に導いた。

「どうした、なにかあつたのか」

火鉢をはさんで椅子に坐つた片山が眉をひそめる。

「じつはこれなんです」

沢田は懐から、二つ折りにした小さな紙片を取り出してひろげた。

政府発行の新一円札——ドイツで印刷されたため、俗にゲルマン札と呼ばれている新紙幣である。

「見せろ」

奪うようにして札を手にした片山が、すばやく札の裏側に目をやる。その顔がさつと紅潮した。「これが例の贋札がんさつですな」

小声でささやく沢田に、札を凝視したままの片山が無言でうなづく。

「少警部から贋札のお話を伺つてというもの、以後、ゲルマン札を見るとたしかめるのが癖になつてしまいましたな」

沢田はようやく緊張を解くと、目元をなごませてそういった。

明治新政府の特徴は、ひとことという金にはまるで縁がないことだった。徳川幕府を倒して政權を握つてみたものの、あまりの金のなさに一同呆然としたという。

やつのことで気を取りなおした新政府は、なんとか金欠症状を克服せんものと、旧幕時代の金貨・銀貨にかえて、紙幣を発行することを思いつく。

かくて明治元年五月、太政官札たせいこうしなる十兩・五兩・一兩・一分・一朱の五種類の札が発行された。

だが庶民たちの評判は最悪だった。たまたま運悪く、俗に金札きんさつと呼ばれた太政官札を手にした

人々は、すぐさま両替屋へ駆けつけて小判や銀貨と引き換えてもらおう始末だった。交換率は金札百両について小判四十両で、いかに紙幣というものが人気がなかったかわかる。

新政府はただちに紙幣と小判の交換を禁止した。さらに政府に納める税金などは太政官札でなければならぬとして、なんとか紙幣を定着させようとした。

まもなく庶民たちも抵抗をあきらめたのか、太政官札は定着の兆しを見せ、新政府の努力は報われたかに見えた。

そこへ降って湧いたのが全国的な贋札騒動である。元々、新政府発行の太政官札は、印刷も粗悪で図柄も単純そのものだった。この程度の印刷技術なら、旧江戸時代の藩札と大差なかったのである。

贋札騒動が全国的な規模であったのは、明治になってもまだ解体されずに残っていた各藩庁が、藩ぐるみで堂々、贋札製造に励んだからだった。しかも贋札の製造は国内だけではなかった。横浜あたりの不良外人が香港や上海で印刷して持ち込んでくるにおよんで、手をつけられない状態となった。

悲鳴をあげた政府は、精密細緻で贋造困難な新紙幣発行を建議。在日ドイツ公使フォン・プラントの紹介により、ドイツにおいて新紙幣を製造することにした。明治三年六月のことである。発行は五年四月であるが、その前年、貨幣の呼称を円に変更(百文は十銭、一両は一円)していたから、わが国初の円札だった。

新紙幣は百円・五十円・十円・五円・二円半・一円・半円・二十銭・十銭の九種類としたが、

予算の不足から、大きさが多少ちがうだけで九種類すべて同じ図柄である。ドイツに注文して印刷された新紙幣の総額は約一億円。そのうち半分近くの四千万円が一円札だった。

大先進国ドイツの印刷技術はさすがだった。図柄も太政官札とは比較にならぬ複雑さで、政府関係者はこれで十年間は贋札に悩まされなくてすむだろうと胸を撫でおろした。

ところがなんと、新紙幣発行とほとんど同時に贋札が出現したのである。

出まわった贋札はすべて一円札で精巧無比、たった一カ所をのぞいてほんものとの区別はまったくつかなかった。

そのたった一カ所とは、札の裏側の中央に押印されている官印のちがいだった。

ほんものは「日本帝国政府大蔵卿」であるのに対し、にせものの方は「太政官大蔵卿」となっていたのである。

この官印は、じつはドイツで押印されたものではなく、日本へ持ちこまれてのち、最後の仕上げとして大蔵省紙幣寮で押印されたものだった。

政府の命令で贋札の犯人捜しを開始した司法省警保寮は、やがて重大情報をつかむにいたる。ドイツから到着して紙幣寮に運びこまれていた新紙幣のうち、一円札ばかり五百万円分がいつの間にか消失しているというのだった。

大蔵省はこの噂を断固として否定。警保寮は、それでは立ち入り検査をと要求したが、大蔵省はどうしても認めようとしなかった。

まもなく警保寮は、あらゆる方面から集めた情報を分析、推理した結果、要旨、つぎのような

報告書を太政大臣(首相)三条実美に提出した。

① 新紙幣の裏に押印される官印は、「太政官大藏卿」と決定していて、すでに五百万円分の一円札が押印済みだった。

② 当初、新紙幣は五年二月に発行されることになっていたが、五百万円分の一円札が消失したことを知った政府は、急遽、新紙幣の発行を二カ月のばし、「太政官大藏卿」の官印を「日本帝国政府大藏卿」に変更した。

③ 結論として、当事件は贗札事件にあらざして、新紙幣窃盗事件である。その犯人は、情況から判断して政府高官の疑いが濃厚である。

だが太政大臣三条実美はまったく動こうとしなかった。というより警保寮の報告書をにぎりつぶしたのである。

ところで当時、片山は陸軍省を舞台とした大がかりな汚職事件の捜査に従事していたのだが、ある日、ひよんなことから大量の贗札が政府所有の建物に隠匿されているという情報を手にした。はからずも汚職事件と贗札事件は水面下でつながっていたのだった。

片山は喜び勇んで上司に告げたが、これも結局は三条実美がにぎりつぶしたようだ。

しかも、まもなく贗札が隠匿されているという建物が火事で焼け、贗札事件は迷宮入りとなった。さらに片山が追跡していた汚職事件の方も、主犯の容疑者が自殺してうやむやになった。

あきらかに闇の中で大きな政治権力がわがもの顔にのし歩いていた。片山は無念だった。これなら町奉行所時代の方がよほどましではないかと怒りに燃えた。かつて片山は、江戸北町奉行所の同心だった。

旧幕時代、江戸八百八町を統治した南北両町奉行所は、明治になっても市政裁判所と名前をかえただけでそのまま残された。江戸は江戸者にまかせた方がよからうという新政府側の判断だった。

したがって徳川家に仕えた旗本たちがごとく裸で巷に放り出されたなかにあつて、南北両町奉行所の与力同心のみは新政府の役人として横すべりしたわけである。その際、新政府に仕えるのをいさぎよしとしないでやめていった者は、わずか数人だけであつたという。

やがて明治四年十月、首都東京の治安確立のため「新警察制度」が採用されることになった。

その手始めは邏卒(世間ではポリスと呼んだ)を三千人にふやすことで、二千人は西郷隆盛などによつて鹿児島から徴募され、残りの千人を他府県の旧藩士たちから募集することにした。

旧会津藩士から邏卒募集に依じて採用となつた沢田は、まもなく中堅幹部の片山を知るにいたる。二人は仕事で行をとにもすることはなかつたが、同じ朝敵同士という境遇のせいか、たちどころに親しくなつた。年も同じ二十七歳だった。

ちょうど一年ほど前のことである。

片山は邏卒になつて間もない沢田を誘つて一献傾けたことがある。その席上、酒の勢いもあつて、憤懣と愚痴まじりに賈札事件と汚職事件を沢田に物語つたのだった。

「少警部、事件が迷宮入りしてからというもの、贖札はただの一枚も出現していませんでしたな」

「その通りだ」

「なぜ、一年も経過したいまごろになって現われたんですかね。犯人はほとぼりが冷めたと判断したのでしょうか」

「——沢田君」

それにはこたえず片山が沢田を見た。

「きみはこの贖札をすでにだれかに見せたか？」

「いえ、まだだれにも見せていません」

「ではこのまま口外しないでくれ。それとこの札は私に預からせてくれんか。もちろんきみのお手柄はまちがいなく上に報告しておく」

「承知しました。おっしゃる通りにします」

「それで、この札を手に入れた経過だがね」

「じつはそれなんですが——」

沢田は白い歯を見せてちよつと笑うと、

「巡回中の邏卒が勇み足で手に入れたものなんです」

「勇み足で？」

「目の前を歩いていた婆さんに、いきなり屁をひっかけられたらしいんです。それで腹が立って、



懲らしめてやろうと罰金七十五錢を取り上げたというんです」

「そりゃたしかに勇み足だ」

片山も思わず笑った。

「本人には説諭して、すぐさま罰金を返しに行かせました。相手方の住所はここです。お持ちになつてください」

と紙片を差し出す。

「すまん、恩に着るよ」

片山は軽く会釈すると紙片を受け取った。ひさしぶりに氣力の充実を感じた。

二

「旦那、今日はもうおよしなさい」

蛇熊あぐまのやつがまたそばにくると、ぬめりとしたなめくじのような顔を寄せてきた。

「放つといてくれねえか」

「意地になつたからつて目が出るわけじゃありませんぜ」

「意地になつてるのは俺じゃない。賽の目の方さ」

「悪いことはいわない。今日はもうよしになさい」

「わかつたよ。そばで小舅みてえにガミガミいわれたんじゃ、出る目も出なからうぜ」

秋庭圭次郎あきばけいじろうは捨てぜりふを残すと、鉄火場となり果てているだだっ広い本堂から廊下へ出た。